

ぐんまの魚の生息環境を考える(7)

淵と瀬を取り戻す

1. はじめに

前回は河川改修や上流からの土砂の供給等の問題から、淵と瀬が減少して『魚が棲みにくい環境』が増加していること、淵と瀬が非常に重要であることを説明しましたが、今回は消失した淵や瀬を取り戻す取り組みについて、考えたいと思います。

2. 淵と瀬を取り戻す取り組み

(1) 利根川の例(前橋市立勝山小学校前)



県内の利根川では平成 10 年に昭和 57 年以来の大きい出水があり、多くの被害を受けました。平成 11 年には、前橋市立勝山小学校前や県庁裏で、写真に示したような水制工が災害工事で復旧されました。

写真は平成 22 年の春ですが、利根川の流れが見事に蛇行して、水制の前面を中心に深い淵が形成され、釣りの好ポイントとなっています。ちなみに、水制工の内部はコンクリートブロックで、表面に自然石が張ってあります。表面の自然石(径 1.2m 級)には、ほとんどコンクリートを使っていない特色があり、魚に優しい配慮がされています。

夏の終わりの川の水がすごく減少した時に、水制工の岩の表面を見て下さい。アユが食んだ大きな“ハミ跡”が見えることが良くあります。

(2) 神流川の例

【取り戻す実験工事前】



【工事後】



神流町(旧中里村)古鉄橋直上流で行われた、「瀬と淵を取り戻す実験工事」における工事前と工事後の写真です。もともと左岸にあった小さな岩盤の出っ張り部に巨石で水制工を、淵を作る目的で作りました。工事後には、水の流れが大きく蛇行し、水制工の上流側と先端部が深く掘れて淵を形成しました。

水制工の材料は全て巨石です。
 (内部は安価な石灰岩)
 子供達が飛び込める深さの
 淵が出来ました。

水産資源も当然増加！



3. つぶやき

神流川の河床には、かつては多くの岩や礫がありました。ところが、下久保ダムが出来るところに庭石ブームとかで、川の石が販売目的で大量に持ち出されてしまいました。定かではありませんが、下久保ダムで沈む場所の川の石の採取を許可したことが、その後の川からの石の持ち出しにつながったとの説もあるようです。事の真相はともかく、神流川は上流域でありながら、小さな礫が主体の平瀬ばかりの川となっしまい魚が棲みにくい川となっしまいました。

神流川では今回紹介した、瀬と淵を取り戻す実験工事に他に、漁協による石材の投入が行われていますので、石材の周りに深みが出来て、少しずつ魚が棲みやすい川になって行くのではないのでしょうか？ただ残念なのは、石取り場で爆破作業により採取した石材ですので、アユが苔を食むのが難しい尖った石材だということです。

利根川では、前橋市立勝山小学校の上下流や県庁裏等に水制工が設置された結果、良好な淵が形成され、今では魚釣りの好ポイントとなっています。淵が乏しく魚が生活しにくい位置では、水制工を設置して、淵を計画することが有効となります。

ところで、下の写真の例は、水制工を設置しても淵が出来ていない例です。水制工の設置に関しては、技術的な判断が難しい面が多い現実がありますので、計画には注意が必要です。



(水制工を設置しても、効果が少ない例) 理由は皆さんお解りだと思います。

話が変わりますが、皆さんは 淵とか 瀬とかの固有名を聞いた事があると思います。有名な淵や瀬は、場所が固定していることを意味していて、非常に古くからあるものと思われます。このような場所は未来永劫に残して行く責務が私達にはあるのではないのでしょうか。